原作／石牟礼道子
構成・演出・独演／井上弘久
音楽／吉田水子
作曲／金子 忍

独演

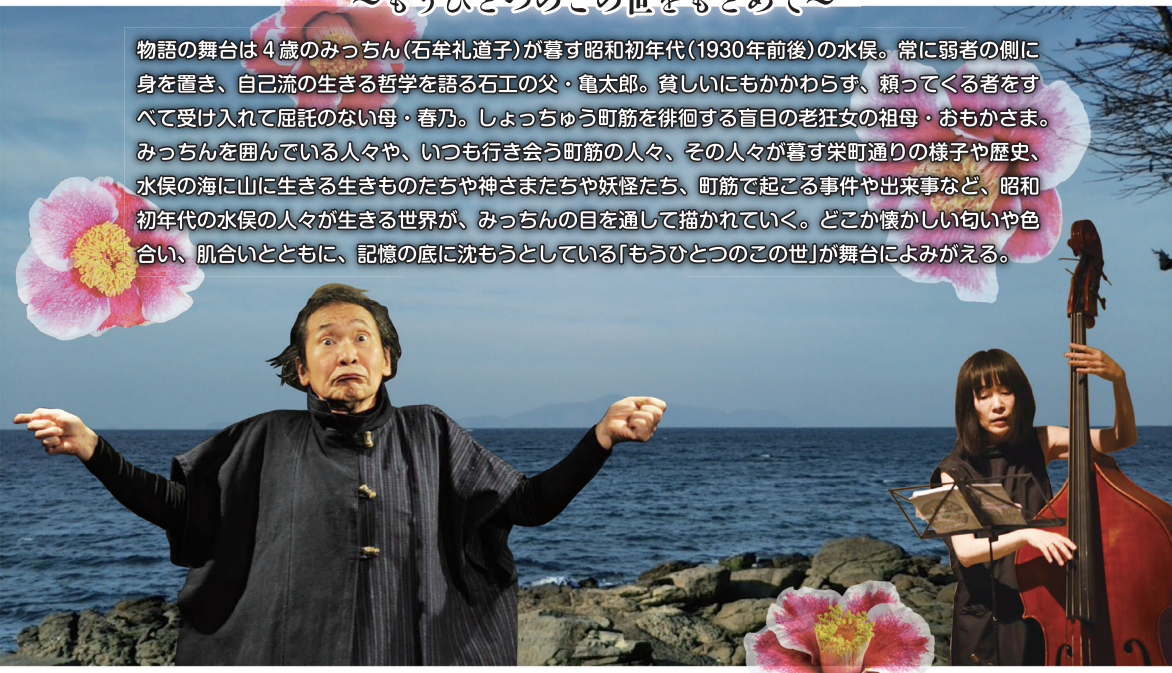
椿の海の記

～もうひとつのこの世をもとめて～

●お話し
石牟礼道子・水俣・作品のこと等 25分

●独演『椿の海の記』
第一章もしくは第二章 75分

物語の舞台は４歳のみっちん（石牟礼道子）が暮す昭和初年代（1930年前後）の水俣。常に弱者の側に身を置き、自己流の生きる哲学を語る石工の父・亀太郎。貧しいにもかかわらず、頼ってくる者をすべて受け入れて屈託のない母・春乃。しょっちゅう町筋を徘徊する盲目の老狂女の祖母・おもかさま。みっちんを囲んでいる人々や、いつも行き会う町筋の人々、その人々が暮す栄町通りの様子や歴史、水俣の海に山に生きる生きものたちや神さまたちや妖怪たち、町筋で起こる事件や出来事など、昭和初年代の水俣の人々が生きる世界が、みっちんの目を通して描かれていく。どこか懐かしい匂いや色合い、肌合いとともに、記憶の底に沈もうとしている「もうひとつのこの世」が舞台によみがえる。



昭和６年の水俣の海には、まだ水銀は排出されておらず、美しく豊かな自然と、それに囲まれた人々の暮らしは、今や忘れ去られようとしている私たち日本人の原風景的世界である。４歳の「みっちん」の純粋な眼差しに、作者・石牟礼道子の40代後半の成熟した詩人の眼差しが交錯して織り上げられたこの作品は、世界文学にも例を見ない稀有な書で、渡辺京二氏は「石牟礼道子という魂のすべてが語られている」と記している。その『椿の海の記』全十一章を、俳優・演出家の井上弘久が構成・演出・出演の三役をこなしつつ、三年をかけて一章ごとを上演し終え、2021年秋より、再演・全国行脚公演を開始予定。その舞台は、吉田水子の音楽とまさに一体となった語り演劇で、他に類を見ない、観る者の感性と知性を刺激してやまない舞台世界である。

♠独演／**井上弘久**（いのうえ ひろひさ）
1952年、東京生まれ。1979年より劇団転形劇場（太田省吾・主宰）に所属。名作「水の駅」「小町風伝」などで、日本および海外各都市の舞台を踏む。1990年より劇団U・フィールドを主宰。構成・演出をつとめる。同劇団解散後、2013年より文学作品を一人で舞台化する「朗読演劇」を開始。2018年より石牟礼道子「椿の海の記」全十一章の連続上演を開始する。

♥演奏／**吉田水子**（よしだ みなこ）
東京藝大、桐朋学園大学研究科卒。躍動感あふれる伸びやかな演奏で、ラテン、シャンソン、タンゴ、映画音楽など、演奏と弾き語りでジャンルの垣根を超えて活躍している。井上とは2013年より朗読演劇での共演を経て、「椿の海の記」の音楽を担当している。

お問い合わせ　吉田水子企画
TEL 050-3746-1566　FAX 050-3737-0238　E-mail minaco@cotori.jp
https://yoshidaminacoplanning.jimdofree.com

吉田水子企画